



甌穴に飛び込んで「いい湯だな!」



飯縄山山頂にて「イイ繩!」



守門岳の山頂にて「よう、ここまで来たな〜」



毛無山山頂にて「俺だあ〜!」



剣岳山頂にて「合成写真ではありません!」



奥穂高岳山頂にて「登ったぞ〜!」

体は心の入れ物に過ぎないのです。 心を強くしなくてはいけません。

田中陽希

んでいかなければならない。企業や学校なども同じですよ。目標を立ててそこに向かってプロジェクトを進めていく。どうしたら効率がいい? どうしたら早く達成できる? フィールドは違うけれど、考えるべきこと、やることは一緒なのです」

ジャングルや岩山、川や湖、海など道なき道を、地図とコンパスだけで進む。さまざまなトラブルが目の前に立ちはだかる。

「レース初日は皆、元気がですが、2、3日目もたつと、体力も気力も精神力も削られ、理性が崩壊し始めます。すると感情がむき出しになってぶつかり合うようになる。たとえば、ただ返事するだけなのにイライラした口調になったり、ぶつきらばうな態度をとったり、相手を気遣えなくなる。チームがでこぼこした状態になると、円滑にチームが回らなくなり、トラブルが発生しやすくなります。そして、最悪の場合、チームメンバーがケガをしたり、修正の利かない人間関係に陥ったりしてしまい、チームはリタイアを余儀なくされ、もろくも崩壊します」

耳が痛い話だ。こういう人間関係は、日常生活の中でも遭遇する。自分だって、無意識にひどい言動をしてしまうシーンはたくさんある。

では、リタイアしないでレースを完走させるためにどうすればいいのか。

「僕らのチームコンセプトは、チーム全員がリーダーであれ。です」この場合のリーダーとは、「自分がこうしたい、こうする」といった主観的な判断をする人ではなく、客観的な判断をできる人のことを指す。

「主観的な判断をすると、自分を守りたいという保身に走ったり、自分だけの気持ち優先して無理を強いることになります。そういう判断をしていくと、あつという間にバランスが崩れ、チームが崩壊します。そうではなく、自分以外の人間を見て、調子が悪い、ケガをしているなど、チームの今の状況・状態から、こうだろう、という客観的な判断をする。時には自分の考えを180度変えなくてはいけない場合もあります。でも自分ひとりでは絶対にゴールでき

心の成長にゴールはない

自然をフィールドにする田中さんにとって、現代社会にはおかしな点がたくさんあるという。たとえば、同じ人間なのに肩書ばかり重視する日本人。皆、老化するのに、老いを恐れ、向上心や成長をやめてしまう人々。自然なくして生きていけないはずなのに自然を特別視する都会人。これらには共通して『心』が欠けていると指摘する。

「たとえば、レース前、欧米の選手を見ていると、体も大きくて体力がありそう、脚も長くて速そうに見えることが多いです。自分たちのチームより、どう見てもカッコいいし、ぜったい強いんだろうと思っても、案外、早い段階でリタイアする。どんなにいい肉体を持っていても心が折れたら終わりです。僕もレースで三日三晩雨に濡れ、さらに目の前の氷河を泳いで渡らなくてはいいけない時、